

中高一貫教育だより

発行：羅臼町中高一貫教育協議会事務局 平成24年2月10日 第3号（通算14号）

羅臼町の海の魅力とは？ 羅臼で生きる事とは？ 若い世代との意見交流

2011年12月1日 中高一貫「水産に関する講演会」

毎年、様々な分野で活躍している人を招いて、お話を聞く「水産に関する講演会」が行われました。今年は中学生

と年齢の近い、二十歳前後の講師の皆さんを、お呼びして「羅臼町の海の話」を基本に、職業人としての悩みややりがいなどが話されました。

中学生にとっても近い将来についてでしたので



沢山の質問がありました。講師の方からは、一度、羅臼を離れてみて感じた事、親の家業を実際に手伝って感じている事、他からやって来て感じる羅臼の事などがあり、中学生の進路を考える大変いい機会となりました。

講師を務めて頂いた、知床財団の松谷一樹さん、知床ネイチャークルーズの長谷川雄紀さん、大木絵里香さん、ありがとうございました。

羅臼の教育を考える・第2回一斉教科会議

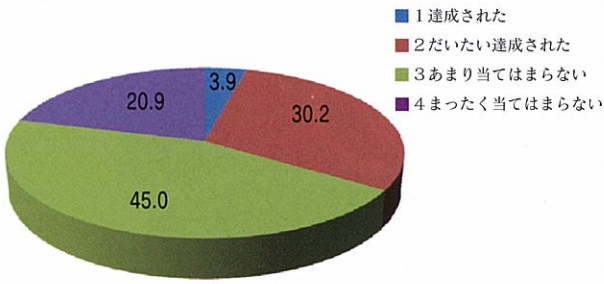
昨年の11月16日に、羅臼高等学校を会場に今年度の第2回一斉教科会議が行われました。内容は、まず羅臼高等学校の授業公開が行われ町内の中学校の先生が羅臼高等学校の授業の様子を参観しました。その後、羅臼町の中高の先生方が各教科毎に分かれて、中高で連携して日頃の授業をどのように取組んでいくべきかなどが話し合われました。また、全体会議では羅臼高等学校で行っている全道、全国的に注目されているスキューバダイビング実習の今年度の取組みについての発表がありました。



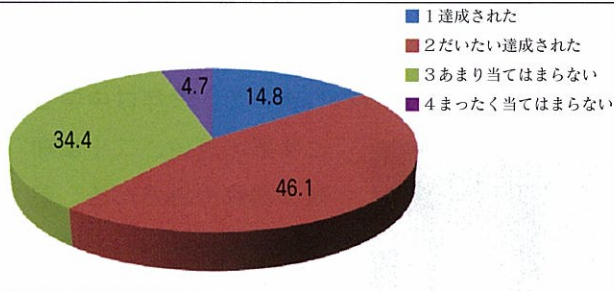
生徒会リーダー研修・交流会

冬休み期間中の1月10日・11日に一泊二日の日程で、公民館と体育館を会場に「中高一貫生徒会リーダー研修・交流会」が行われました。羅臼高等学校、羅臼中学校、春松中学校から19名の生徒と引率者5名の24名が集まり、生徒会同士の親睦を深めたり、コミュニケーション能力の向上についての実技や講座を行いました。次年度以降の羅臼町内の各校や中高一貫にとって、有意義な研修会になった事と思います。

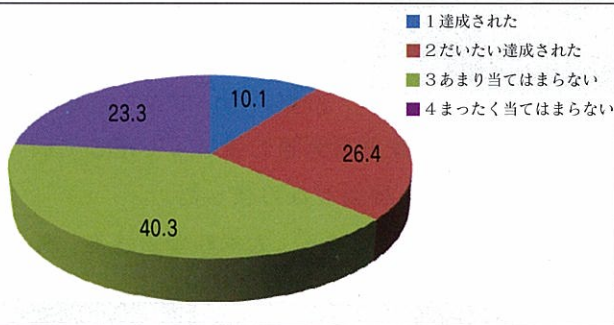
中高一貫教育のテーマ「地域を愛する生徒の育成」はふさわしいか



「各教科の基礎・基本の定着を目指す」は十分に達成されたか



中高一貫教育は、今後も継続していくべきですか。



中高一貫教育評価アンケート結果

今年度で5年を迎えた「中高一貫教育」について、保護者、教職員・町教委の2者についての、12月の末に行ったアンケート結果がまとまりました。

詳しくは中高一貫教育の事務局校の羅臼高等学校の方から詳細な報告がされることとなりますが、今回は保護者の「中高一貫教育」に対する評価の一部を抜粋して紹介します。

まず、中高一貫教育のテーマである「地域を愛する生徒の育成」はどうであったかについてですが、65%の保護者が何らかの改善を望んでいるという結果でした。

次に、最も保護者の関心が高いと考えられる学力についての項目である「各教科の基礎・基本の定着を目指す」については、60%を超える保護者が学力の定着については、否定的な意見となっています。また、別項目の「連携型入学者選抜の導入により中学生の意欲が低下した」と否定的に感じている保護者の割合も80%程度に上っています。

最後に、最も根本的な問題である「中高一貫教育は今後も継続すべきですか」という項目については、60%の保護者が否定的な意識を持っていることが分かった。

一般的には、中高一貫の理念については、保護者・教職員とも肯定的な意見であり、学力向上については不安を抱いている傾向が強い意見でした。反面、知床学やボランティア活動、生徒会交流、豊漁の舞等の生徒会関係の活動については、概ね高い評価となっています。

知床・らうす・世界自然遺産の生き物 ② ～「知床・らうす」としてのヒグマ考～

「知床・らうす」を象徴する野生動物は、海の鯨類と陸のヒグマと言っても良い。一般的に羅臼を訪れる多くの観光客も知床・らうすに行けば、ヒグマと遭遇できるものと思っているかもしれない。でも、実際に羅臼に生活する町民にとっては、そんな単純な話ではない。ヒグマの生息密度が世界一とも言われる知床・らうすは、同時に人の生活圏とヒグマの生活圏が重複する。また、町民はヒグマが陸上の哺乳類では最大最強の動物であり、人と遭遇した時の危険性は十分に理解している。

しかし、そのヒグマとの共存を目指した「知床・らうす」に生きる者として、今一度、ヒグマについてあらためて考え・関心を持ち続ける必要はあるかもしれません。例えば、多くの人が、秋になれば遡上するサケマスを食べるヒグマのイメージを持っているかもしれませんが、



日本の河川でそんな姿が見られる場所がいったいどれだけあるのか？ヒグマがある程度の生息密度を持って生活する環境があり、なお且つ、サケマスがまとまった数で遡上出来る良好な自然環境の河川があり、さらにダムやふ化事業の影響を受けないで中上流部までサケマスが自然産卵できる状況など、多くの条件が揃わなければ、サケマスを食べるヒグマの姿を見る事は出来ないのである。そんな場所は、日本の中では羅臼を含めた、知床半島のごく一部でしかないと断言できる。言いかえれば、その「知床・らうす」の極めて貴重で質の高い自然環境の象徴がヒグマであるということになる。



その事実が、日本や世界の多くの人を「知床・らうす」に惹きつけて止まないものである。しかし、そのヒグマも、ヒグマのみで存在できる訳ではない。あの巨体を支えるだけの食べ物とヒグマ達が次の世代を育み、生かすことのできる「知床・らうす」の自然環境の保全がなされ続けなければならないのである。我々町民もヒグマとの共存を模索しつつ、その事を強く意識する時に来たのかもしれない。